

## 支那佛教の日本傳來上考ふべき諸問題

大 屋 德 城

なるべく一般的な話をせよとの事であつたので、この題目を掲げたが、何分問題が問題なので、不満な個所も生じやうが、その點は豫めお斷りして置きたい、問題の意味は支那の佛教が日本に傳來した上に就て、色々考へてみなくてはならぬことがある。こゝでは其等の點を少しく研究してみたい。こゝに支那佛教と云ふのは普通の意味に於ける、つまり、支那に於て行はれた佛教と云ふ意味で、支那特有の佛教といふ意味ではない。扱て、六朝、隋唐の佛教は宗派から言へば、大體に於て、前者にあつては、阿毗曇宗、成實宗、三論宗、四論宗、地論宗、攝論宗、涅槃宗が行はれ、後者にあつてはそれが發達して、天台、華嚴、念佛、禪、俱舍、唯識、密等の宗派が生れて來てゐる。大凡此等の佛教が日本に傳來するに就てはもとより、一時に來たものではない、大體に於て古きものから新しきものへと順序を追ふて傳つたことは無理もないことであり、又此中には傳つたものと傳らないものがあり、且つ傳らないと言はれてゐるものでも幾分か傳つたものもある。

先づ最初に傳つたものから考へてみると、その中には時間がある。即ちその傳り方に遲速があ

る。この問題は勿論從來云はれてゐるやうに、交通の便不便に依つたことも幾分かは事實ではあるが、そのみで片付けておくことは出来ない。例へば所謂奈良の六宗は六朝隋唐の佛教を含んでゐるとするが、眞言は同じ唐の佛教であつてもおかれてゐる、次に念佛も亦實際それが完全な形に於て歴史の表面に現れたのは平安末と見做さなくてはならない。すると、支那では唐朝に盛んであつたものが、日本に於てはその後三四百年を距てゝ現れたことになる。凡そ此等の問題はどうか考うべきであるか。

次に注意すべきは、宗派の十分傳はらなかつたもの、若くは書物のみ傳つたもの、即ち涅槃攝論等及び隋の信行に依つて創められた三階宗等は、文献の上にその名稱のみはこれを見るも、實際の宗教運動を認めることは出来ない。又善導流の念佛は我國に非常な流行をみたるも、慈愍流のそれは行はれたとは思へない。東晋の惠遠流の念佛も亦日本に於ては明かでない。凡そ此等の問題は如何に考へ、如何に取り扱ふべきか。唯、今迄の衆生根機の如き漠然とした言葉で以て解釋してよいものか否か。更に支那佛教で日本傳來後變化なしとみるべきもの、これは所謂奈良佛教を指して居り、此等は大體に於て支那佛教を其儘承けついでゐると考へられてゐるが、これも果して考へてゐるやうに同一なりや。傳教の圓頓戒も支那の列祖とは異つてゐると思はれるが、段々時間を経て徳川時代になると、支那佛教への復歸運動が起ってくる。

猶最後に、黃檗宗が禪念佛の融合を考へ、漸次念佛を入れて、今日、禪としても念佛としても餘り生命を持たないが、これも亦考ふべき問題である。

大凡、斯様な問題は今一度考ふべきもの、所謂近代的な言葉で云へば再檢討、再認識を必要なきや。以上を總論として以下個々の問題に亘つて話を進めよう。

最初に、禪を中心として話をすゝめる。

尤も此等の宗派が傳來の遅れたことに就いてはその宗その宗で説明に相當苦心はしてゐる。例へば、眞言の傳來の遅いのに對しては善無畏渡來説があり、禪宗には達摩渡來説がある。此等の傳説の構成されたる過程を考へてみると、一般に自分の宗派が古くより存在してゐたものであることを示さんが爲に作られた傳説であることがわかる。従つて此等に對して、歴史的の問題を云々するは當を得ない。善無畏の渡來説を考へてみるに、彼は東大寺の西南隅に八十日ばかり庵を結んで居住し（現在の眞言院）次いで久米寺に移り二ケ年程居り、その間、南天の鐵塔の二分の一、即、八丈の高さの鐵塔を建てたと云ふ。この傳説は勿論歴史的價值はない。然し斯る傳説の生じたことは一考する必要がある。眞言宗は此の傳説から次のやうな傳説すら生んでゐる。即ち弘法大師は久米寺の塔下で大日經を發見されたが、その内容を理解し得なかつたので、入唐されたとの傳説を生じ、更に弘法大師ともあらう人が、大日經位を理解し得なかつたとは考へられない。それ故にその大日經

は梵本であつたに相違ないと云ふやうな解釋すら生ぜしめたのである。然し、此れも亦大日經は何にも弘法大師の發見を待たずとも、現に此時代の文献である正倉院文書並に西大寺に現存する寫經に依つて、典籍の傳來すでに明かなことである。従つて此の傳説は眞言宗が自派の傳來の早きものであることを示さんとする氣持が形を現して、かゝる具體的表現をとつたと見るが至當である。

第二に禪宗の場合を考へてみると、此の宗では聖德太子が片岡に遊行された時、道に餓人に遇はれたが、この餓人が達摩であると云ひ、一心戒文、本朝文粹等の中には太子と餓人との問答をのせてゐる。鎌倉時代にはこの種の傳説をのせたものがいくらかもある。現在片岡の地に達摩寺の建てられてゐるのも、よくこの間の消息を語つてゐる。これも勿論前者と同様な心理狀態からである。

當時禪宗は常に天台からかなり壓迫を受けたので、榮西は興禪護國論を著して禪宗の古いことを示してゐるが、これはあたかも、支那で道教と佛教とが争つた際に、その發祥を繰り上げて古くしたと同じことである。然らばこの禪が何故斯くの如き長い間日本に閑却されてゐたか。

禪は六朝の時達摩が傳へたと云ふが、唐朝の末から五代にかけて、神秀惠能等現れ、五家七宗と分れて盛んになつてゐる。此等の禪は平安朝の初頃から幾分知られて居るが、鎌倉に於て始めて傳來を見るのである。禪の傳來に關する最も古い傳説は白雉四年道昭が長安に赴き、玄奘に就て法相を學び、後玄奘より禪をすゝめられて學んだ記事があり、隆化寺の慧滿禪師に師事したことから

して、道昭の禪は達摩の禪と云はれて居るが、之は法相宗の觀門を學んだと見るのが至當であらう。古くは村上專精氏が法相の觀門と禪を學んだであらうと折衷説を出され（佛教史學）、近くは境野黃洋氏が日本佛教史講話の中に於て法相の觀門であることを主張して居る。然しながら、夫れがたとへ達摩禪にせよ、道昭は元興寺の一隅に禪院を建て、靜坐したと云ふ事實が文獻にあると云ふに過ぎない。従つて、その宗教としての實際の影響を考へることは出来ない。

次には道璿が天平八年大安寺西塔院に於て、普寂より受けたる所謂北宗禪を移植したとの文獻をみる。この法を行表より嗣いだのが即ち最澄である。この點から傳敎の禪を云々するも（佛法相承血脈譜）仁忠、傳敎大師傳には此記事がないので、それが達摩の禪相承とするところに疑問がある。又例へそれが事實であるとしても、傳敎の傳へた達摩禪が後世に如何程影響を及ぼしてゐるかは明かでない。

智證の請來錄には禪に關するものを可成りのせてゐるし、更に傳敎の次ぎには義空來つて東寺にあり上流社會に禪を廣めてゐる。平安中期には東大寺の奄然入唐し、達摩宗を立てんことを請ふも許されず、平安末には叡山の覺阿なる者が入唐、杭州靈隱寺の佛海慧遠禪師に就て嗣法したことをのせてゐる。又榮西直前には師承なくして禪を唱へたといふ能忍があり、彼は攝津三寶寺に於て禪を唱へてゐる。

以上は榮西以前の禪の傳來に關する事實であるが、これ等を全く事實としてみても、猶禪の實際的宗教的活動が如何程あつたかと云ふ點になると覺束ないものである。概括的に言へば、我國に於ては禪宗はまだ理解されてゐなかつたと言ふことが出来る。榮西にしても第一回入宋迄は一向禪に心がなく、文治三年の再度入宋の後に於て始めて禪の嗣法が行はれてゐる。これはつまり、日本の佛教が支那で云ふ敎宗に屬するものであつたために理解出来なかつたかと考へられる。その理由は支那の事情を考へる事に依つて能く了解される。即ち達摩が初めて支那に來た節には禪法は理解されず、嵩山に登つて坐禪し、そこで入寂してゐる。彼が支那人に理解されなかつた事情は、たとへ夫れを史實としては考へられぬとしても、碧巖集を一顧すれば了解されるであらう。即ち碧巖の話は禪を當時の人が理解し得なかつたことを傳說的に示してゐると思ふ。斯様に考へると、日本人が達摩禪を解し得なかつたのも、同じ事情に依るのではなかつたかと考へられる。

第三に、幾分傳つたか、或は傳らなかつたもの。

最初に涅槃宗に就てみるに、本宗は支那に於ては、いくらも涅槃經の翻譯あり盛んであつたやうであるが、日本には傳らなかつたらしい。涅槃宗の名は凝然の三國佛法傳通緣起大安寺の條に見ゆるが、これに就ては前田慧雲氏は古い「東洋哲學」にそれに對する意見を發表されてゐる。涅槃宗については法王帝說の中に「悟涅槃常住五種佛性之理」の言葉あり、猶聖德太子が義疏中に本義とし

て引用された法雲は法亮の弟子で、法亮は涅槃宗の人であると傳へてゐること、或は玉蟲厨子には涅槃經聖行品の施身聞偈の圖が密陀僧で畫かれてゐる等、凡そ此等の事實でも當時涅槃經の佛性常住説が傳つたことは確かであるが、只此だけの事實で以て涅槃宗の日本傳來を云ふことは出来ない。奈良朝に入ると涅槃經に關する文献も多く存する。元西大寺に藏せられた集解七十一卷、正倉院の天平十年の跋文ある光明皇后の同寫經、又日光の天海藏には平安初期の寫經を藏してゐる。且つその疏にしても、石山寺には法寶の撰數卷を藏してゐる。然しながら涅槃宗が傳來したかどうかは明かでなく、勿論行はれたとは思はれない。

攝論宗は、我が奈良朝に於て、大安寺資財帳に攝論衆の名があり、衆が宗になつて來たかはこゝに論じないとしても、兎に角眞諦譯の攝大乘論を中心とする研究も多少は行はれたものであらう。又地論宗にしても隋の時代には洛陽を中心として盛に講敷され、日本へも典籍の將來されたことは事實なるも、宗としては明かでない。

更に律に關しても南山律宗は鑑眞に依つて傳來されたけれど、其の他の例へば法蘊の相部宗の如きも、その典籍が同時に將來されてゐることは彼の東征傳に依つてもわかるが、相部宗や東塔宗は南山律に壓せられて傳播しなかつたとみるのが至當であらう。

以上述べた如き此等の宗が表面に出でずに終つたと云ふことは、教義上に於て、傳來以前に、皆

一應の役目を果たしたが故である。

三階宗は近年燉煌より其の書が発見されて以來喧傳されて來た。この宗の典籍は天平十九年の文書には既にこれを見るが、その中、三階律周(又は同に作る)部、略明法界衆生根機淺深法などいふものは今にどこにも見當らない。日本の三階宗の本は禪院寺から出たものであるが、此の寺は道昭が元興寺の一隅に立てたもので、後に奈良に移されたものである。かの佛足跡は王玄策が印度より齎したものが唐の普光寺にあり、それから道昭入唐の際將來したもので、この三階の典籍も恐らくその折道昭の手に依つて齎されたものであらう。天平の中頃には玄昉が五千餘卷の經典を將來してゐるが、その中には三階宗の書も含まれてゐたかと思ふ。然しながら此の經典は讀まれた形跡なく、平安朝には最早見出し得ない。併し他の宗派の書には往々三階の記事があり、例へば西方要決、華嚴五教章、淨土群疑論などの中にも三階に論及した點があり、書物では高尾神護寺藏の貞元錄に依る一切經には三十五部を含んでゐる、梅尾の明恵上人の十三回忌には一切經中三階宗に關する缺本を補寫したとの記事がある。これが日本で行はれないのは支那で邪教として禁せられた佛教でもあつたが故であらうが、然しながら三階宗で説く普佛普法ならば密教など、一脈通ずる點もあるやうだが、如何なる意味で一切行はれなかつたのか明かでない。

慈愍三藏の念佛に就て一言すれば、彼は唐の人で、印度にあること十八年、開元七年に長安に歸



り、天寶六年六十九歳で死んでゐる。丁度聖武の天平十八年に當る。その著書に往生淨土集があるが、本書が日本に傳つたか否かは明かでない。支那では慈愍の後は續かず、本書も亦失はれ、只宋の智覺禪師の萬善同歸集の中には三ヶ所引用されてゐる。宋の時代に此を古藏に得て刊行し、これが朝鮮に傳來し、現に海印寺にその版の殘闕があり、余は大正十一年に印成將來して居る。(拙著「鮮支巡禮行」所收)

此等も如何に善導流の念佛が日本を風靡してゐたとは云へ、幾分かは日本にも傳つていゝものであるのに、問題とならなかつたのは注意すべきことであらう。此等の問題に對して今一つ新しい見方をする必要がないか。

要するに、支那佛教の日本に傳るには大分距離がある。隋時代に相當する時には六朝の佛教を、天武、持統の時代には彼の地で榮えた禪念佛眞言等は傳らない。斯のやうに時間に於て差のあつたのは交通の便不便以外に何か考ふべきではなからうか。日本人が支那の文化におくれて追隨するところが出来なかつた故であらうか。此等のことを今少し大局の上から達觀する必要はないか。

最後に奈良の六宗に少し言及しよう。所謂、古京の六宗は學問佛教と呼ばれてゐる。成程理論としては此の見解でよいが、これが宗教として行はれたあとをみると、必ずしもそうばかりではなく、その實際信仰は密教化してゐる。即ち理論的方面より離れて、漸時密教と合流する氣運に向つたの

で、平安朝以後鎌倉に於ける六宗は皆密教に裏書されてゐる。その實例を云ふと、小島の眞興は東密の一流を作つてゐる。その教義は胎藏儀軌、金剛界儀軌を幾分か法相宗の教義に引き付けて釋したものである。極端に云へば法相との調和を圖つたもので、平安末に至つて中川實範の大經要義鈔七卷の中には、徳一の眞言未決に反して、弘法大師の見解を擁護してゐる。鎌倉になると、奈良は皆密教にあらざるはない。西大寺の叡尊も亦眞言律を始めてゐる。凝然は八宗兼學と言はれるが、自ら華嚴兼律金剛欣淨沙門と稱して居る。こは一般に奈良六宗の特徴であつて、かゝる點に奈良の六宗が支那佛教そのまゝと言ふわけにいかない所があるのである。榮西等も一方には台密、一方には禪を傳へてゐる。従つて梅尾明恵上人が華嚴と密とを兼修したことは何にも獨創ではなく、南都佛教の傳統的精神を繼承したに過ぎない。最後に南都佛教が學問的佛教となつて死滅したのも如何に考ふべきであるか。今日は只疑問を提出して諸君の研究に待つことゝした。(講演大意)